

ふるさとへ帰って

谷川出身 廣田葉子（八十三才）

平成二十八年初夏。待ちに待った東京北斗会主催の帰郷。そして新幹線開通との二重の喜びを胸に、車窓を眺め、車内での弾む会話の中、一路ふるさと北斗市へ向う列車。新函館北斗駅の土を踏み、ひと呼吸する空気の味。安堵感と、生きている実感がありました。

北斗市役所の心温かな歓迎。そしてバスに揺られ、次々に変わる風景は、脳裏に浮かぶ記憶と、今、目の前の光景を重ね重ねの懐しい思い出は、感極まるものでございました。

兄が勤務していたセメント会社の見学は、社員の方の案内説明の中に、兄の汗と、生前の面影、生涯お世話になった会社の重みに、感謝の心でいっぱいになりました。また、がろう見学での際、昔の地図を手にして、「ここは何処？あそこは？」バスの中では、数々の言葉が飛びかい、その住居地図には、子供時代、青春時代の友の名前が次々に出てきて、この時は、自分の白髪と共に歳月の流れを感じ、懐かしさと、少し寂しい感じが入り混じり複雑な気持ちになったものでした。



この様な数々の思い出の蘇りで過した二泊三日の旅は、私にとってかけがえの無い老年の宝物となり、また生きる力をいただきました。また機会が有りましたら、もう残り少なくなった数える程の友と至福の時を過ごしたいしであり、四時間で昔の時代に戻れる新幹線に、ひよいと足をかける自分を想像してしまいます。

千葉の空から遠くふるさと上磯の空を想いつつ、東京北斗会というお仲間がいる事に幸せを感じ、ペンを置く事にします。

最後に、この度の旅のご準備を下された幹事の方々、そして大歓迎を下された北斗市役所の方々に申し上げます。



私のふるさと訪問旅行

(石別) 山田 道夫

この旅行は北斗会の皆さんとほとんど交流のない中での妻との参加でした。

新幹線はやぶさ11号は定刻通り出発。列車内のあちこちで飛び交う上磯弁、「うんだうんだ」とか「いかったなあ」など、断片的に聞こえてくる会話が懐かしく、旅行への不安な気持ちを一扫してくれた。はやぶさは単に速いのみならず静粛性も申し分なく、快適な旅を与えてくれた。

走り出して数時間が過ぎて、「間もなく津軽海峡トンネルに入ります。」と車内アナウンスがあり、眠りから醒めた。漆黒の海底へ、列車はどンドン進んで行く。軽い閉塞感を覚え、車窓を眺めていると、50年前の高校時代のH君とS君の言い争いが走馬燈のように思い出された。それは江差松前線の汽車の中だった。

「津軽海峡トンネルが完成したら、函館への上り線が、逆に東京からの下り線になるぞ！ そうなるとお前の方が田舎者になるぞ。」

この他愛もない二人の会話に私は、ほくそ笑んだのだった。

新函館北斗駅に到着後、数々の盛大な北斗市主催の式典、市専用バスでの名所や景勝地への案内など、大変お世話になった。特に、バスガイド役の市職員である石川さんのユーモアたっぷり、緻密で軽妙なトーク司会進行には脱帽した。

この旅行で多くの貴重な体験をさせていただいた。食べてよし、見てよし、泊まってよし。その中で最も印象に残ったことは故郷の人々との会話だった。心の交流を通して絆の大切さを確認できた。

遠く離れていた東京との距離感が、この新幹線開通によってグーンと狭まり、ふるさと北斗市が経済・文化・教育の各方面で今後、スピーディーにかつ大胆に活性化する可能性に期待すること大である。

このふるさと訪問旅行の企画・実施にご尽力下さった北斗会役員並びに北斗市職員の皆様に心より感謝を申し上げます。

